

昭和十一年九月四日發行
昭和十一年八月一日發行
東京大學出版部發行

京鹿子



8月号

惜春

丸山佳子

別
声
で
選
挙
応
援
下
萌
え
て

曆
に
は
な
い
こ
と
お
こ
り
桜
咲
く

山
桜
一
流
気
分
で
ダ
ム
鏡

鴨
が
去
に
橋
が
私
を
待
ち
く
れ
て





燕来て水に浮くチリ沈むチリ

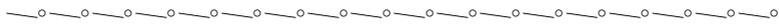
佐保姫も児づれ賑しきバーベキュー

窓の芽は不揃ひ私のペン立ても

春はゆく長いものには巻かせをこ

春落葉才あるものは振り向かぬ

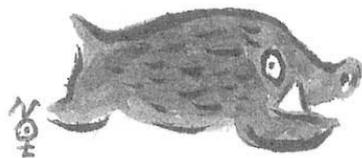
花は葉に同じ道ゆくつまらなし



豊 田 都 峰

清響集 その七十六

あ と か ら の 目 高 は 雲 に の り き れ ず
水 あ や の 目 高 は し ば し 風 の な か
わ く ら 葉 の 遠 ひ び き し て 昼 の 杜
若 竹 や 光 も 風 も す べ り に く る
青 楓 国 母 の 陵 は 埋 め き れ ず
竹 葉 散 る 石 塔 陵 の 宙 埋 め む

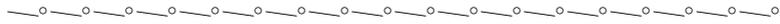


ひらりとて金魚の午後の沙汰もなし
こもり日の蝶となりゆく杜の午後
葉桜の宮址は風の語るのみ
野となれる官衙趾蝶をひとつ生む
途中めくあたりはいつも茅花風
北 撰 や 青 葉 暦 の 丘 棲 ひ
引換へに得しは野末の花あざみ
梅雨茸けられてさめるなにもなし

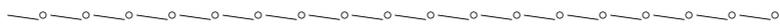
伊賀・伊勢路

豊田都峰

かげろふや佐保路にであふ人はだれ
揚ひばり平城址に巢はいくつ
風すぢも「ひだりなら」へと青葉の辻
青葉 雨庵の主と聞くもよし
故郷塚青葉いつぱいさしあげむ
句碑ひとつ翁にはべり照青葉



伊賀路また伊勢路まるごと薫風裡
翁また柘植に生まれて揚ひばり
きんぼうげ福地城址へみちびける
竹葉散る空堀址も埋めきれず
峠越ゆる東海道の青嵐
馬子唄は峠青葉の風のもの
つばめ反る鈴鹿を下りきし宿に
仇討ちの話二つの青葉風



秀華採集

桜貝わたくしといふ遠流かな

井上菜摘子

桜貝を主役とした遠き時間、空間へ強制的に運んでゆく「わたくし」。そしてしばしそこに止まらざるを得ない「遠流」という借辞、たいへんいいものを組み合わせたことを手柄としたい。巻頭連続だが、前回の空間・時間とともにこの空間・時間も評価する。

春昼の画中に空の洋酒瓶

村田富美子

ふるさとは雲追ふ風にこぼし咲く

長野 珠江

前句の「画中・空」の把握が春昼の雰囲気と合う。後句の「ふるさと」はすばらしい風土である。

鈴鹿 仁

梅雨

迂闊にも石蹴つてより梅雨に入る
一声の愚痴零しぬる梅雨がらす
先を読む川の鼓動に目高の眼
今年竹風に遊びて天の距離
笹散つて噂のひとつ消してゆく
松籟や戦記知る蟻山を出づ
でで虫や知足のひとつ日雲逝かす

近 詠

宇都宮滴水

黒蝶

花は葉にくすぐり過ぎし耳の穴
はつ夏や産声たしか半鐘台
黙ンまりの別れもありし青峠
おづおづと道を付けぬる恋の蝮
黒蝶を囲ひ掌のひら重くなる
春の陽を入れ積木のなほ積まる
さくらら貝拾ひ嘘なき人とぬる

神麓集



中国の魚山声明ころもがへ
大原の呂川・律川川開き
生きいきと山女の泳ぐ呂律茶屋
魚山滝南を呂とし北を律
滝音に声明和して音無しに

林 日圓

熊野の長藤

北村 香朗

熊野と母の塔並びたる藤浄土
樹齢八百枝八方に藤の浪
長藤の貴重な樹齢風の舞ふ
樹齢保つ熊野の長藤香を放ち
長藤に天龍の風及びけり

白鉄線
禪門や死生一如と松の芯
水のやうな夜をさそひけり白牡丹
地を恋ふて卯の花雨をしたたらす
山うつぎ空へひろがる川の音
白鉄線白に徹して咲きのぼる

藤岡 紫水

吉田 多美

手術して見る物みんな四月馬鹿
病めば句も過去形となり汗を拭く
眼帯をはげせば牡丹大輪に
杖頼り少し歩めば日脚のぶ
片眼にも燕の飛んで空碧し

花の寺

丸山 冬鳳

酸素吸入器命かけます花の寺
鶯の読経日和や住職留守
鶯に撞かせてもらふ一点鐘
まとひつく風の落花や吸入器
鶯に好みの止り木あるらしく

吉備郡

和田 照海

拳ほどの吉備真備の里笥
曲りよき吉備の笥ゆゑ親し
雲雀野にすはれば夢のつづきとも
草笛の変ホ長調それもよし
奥坊へいつぶく石や遅桜



京鹿子集

豊田都峰選

甲冑はまだ怒涛なり花しんしん

誰に手を振るでもなくて山桜

句読点落してゐるよ揚雲雀

菜の花を点してをりぬ感情線

桜貝わたくしといふ遠流かな

春昼の画中に空の洋酒瓶

蝶追へば丘の煉瓦の美術館

五月来るペーパーナイフ両刃なる

めんどりの一羽遠目の畑の蝶

新緑の襲かげりゆく二上山

亀岡 井上菜摘子

京都 村田富美子

里訛り弾んで花の坂下る

比翼碑にさくら散華の紅しづく

産土の箒目に燃ゆ落椿

ふるさとは雲追ふ風にこぶし咲く

黄水仙名もなき壺のよみがへる

卒業やサボテンジユースで謝恩会

砂漠町今朝の挨拶喜雨のこと

荒野にも太鼓の響き夏の星

溪谷に涼風医学談義かな

登山道日中文化をあれこれと

北桑田 長野 珠江

アヲチ 伊吹 之博